



朝のこない夜はない

山首 鈴木正修

素直な心で

先日の御開山会の挨拶の中で「大悪は大善の来るべき瑞相なり」（悪いことの後には必ず良いことが来る）というお話をさせていただきました。この言葉は日蓮聖人の御遺文『智慧亡国御書』にあります。

当時、鎌倉一帯は天変地異が並び起こっていました。正嘉の大地震は一番有名ですが、その他にも不吉な大彗星が現れたり、疫病が流行ったりしたので、数年のうちに何度も元号が変えられています。これを「災異改元」といいます。また幕府の内乱である北条時輔の乱が起り、さらに蒙古襲来がありました。これらを日蓮聖人は「大悪」と言われたのです。北条時輔の乱と蒙古襲来は、『立正安国論』に予言されたものが現実となっていました。



「大悪の後に大善が来る」というのは、どういう意味かというと、日蓮聖人が言われるのは、「世界中に害悪が充満して混乱に陥れば、逆に、唯一の正法である法華経のお題目が世界中に広く流布することの疑いのない瑞相である」ということです。悪いことが並び起こることによって、正しい教えに帰依しなければいけないと人々が正気に戻って、その結果お題目が流布するようになる」と日蓮聖人は考えられたのです。

日蓮聖人は「大悪は日本の人々が正しい教えを信じていないから、起こっているのだ」と諸宗と幕府を批判されました。諸宗批判とは四箇格言に言われる「念仏無間・禅天魔・真言亡国・律国賊」です。中には法華経を誦する宗派もありましたが、日蓮聖人は「お題目を唱えなければいけない」と言われました。さらに「間違った教えを流布させている大元は幕府である。その最高権力者であった北条



ときより 時頼・重時両入道は今、無間地獄に堕ちている」と主張し
つづ 続けたことで幕府の勘気を被り、その結果、遂に佐渡に流
罪となられたのです。

佐渡流罪中、日蓮聖人は昼夜を問わず、高い山に登って
大きな声で叫んでおられたそうです。

最近、日蓮宗教師で兵庫県立大学名誉教授の岡田真水先
生が『大音声をはなちて』という文章を発表されました。

岡田先生は東京大学を卒業後、ドイツに留学され、文学博
士の学位を取られたという方です。

その発表された文章の中に『光日房御書』の中の一節が
引用されています。

「急ぎ急ぎ国土に駈を出ださせ給いて本国へ還させ給えと、
高き山に登りて大音声を放ちて叫び」

私は日本の国を救おうと思っでやっでいるのだ。早く鎌



倉へ返せ」と大きな声でおっしゃったということです。

『種種御振舞御書』にも次のようにあります。

「夜もひるも高き山に登りて、日月に向かつて大音声を放つて上を呪詛し奉る。その音声一国に聞ふと申す」

「上を呪詛し奉る」というのはこうです。「梵天・帝釈天

・日天・月天・四天王はどうなされた。天照大神・八幡大

菩薩はこの国におられないのか。法華経の行者を守るとい

う釈尊との誓いをなせ果たされぬ。もし日蓮を守らず見捨

てるならば、法華経に大嘘をついた罪によって地獄に墮ち

はで、這い出られぬことになる。その罪おそろしと思ふならば、

急ぎ急ぎ予言したように内乱の現証を示され、日蓮を鎌倉

へ返されよ」と、諸天善神を諫められたのです。

この自信、日本国を思う心、何人も及ばないものです。

こう言われた後に日を待たず、現証が現れました。北条



時輔ときすけの乱らん、いわゆる「二月騷動がつそうどう」が起おこったのです。『立りつ正安国論しょうあんこくろん』の預言よげんが的てき中ちゆうしたのです。これに幕府ばくふは驚おどろいて、それまで牢屋ろうやに入れていた日蓮聖人にちれんしょうにんの弟子達でしたちをただちに赦しゃ免めんにしました。

しかし、日蓮聖人にちれんしょうにんに対しては佐渡流罪さどるざいを赦免しゃめんすることはありませんでした。すると日蓮聖人にちれんしょうにんは、さらに強つよく諸天しよてんを諫いさめられたのです。その結果けっかどうなったか。これも『光日房御書こうにちぼうごしょ』の中なかにあります。

「いよいよ強盛きやうじやうに天てんに申もうせしかば、頭かしらの白しろき鳥からず飛とび来きたりぬ。彼の燕かえんの丹太子たんたいしの馬鳥うまからずの例れい：」

高たかい山やまに登のぼって、天てんは何なにをしていいるのだ。早はやく私わたしを赦しゃ免めんして鎌倉かまくらへ返かえせぐといよいよ強盛きやうじやうに言いわれると、白しろい頭あたまの鳥からずが飛とんできたのです。

頭あたまの白しろい鳥からずは、普段ふだんは妙音菩薩みやうおんぼさつにつき従したがって天上界てんじやうかいに住す



んでいると言われます。また、頭の白い鳥は信仰の篤い人間の前にしか姿を現すことはないとも言われています。

しかし、時に一心に天に向かって祈るものがあると、そこに舞いおろるとい話もあります。そこで日本では頭の白い鳥は古来より吉瑞をもたらす霊鳥として崇められてきました。

日蓮聖人が言われた「燕の丹太子の云々」というのは、これは中国の戦国時代（紀元前3世紀頃）の話に基づいています。

秦王・政（のちの始皇帝）は、破竹の勢いで次から次へと他国を攻め滅ぼしていききました。次に狙われたのが燕という小さな国でした。燕は、攻め込まれたらひとたまりもありません。そこで太子の丹は、老いた母を残して国を守るために、人質として秦に赴いたのです。秦王・政はすぐ



太子を牢屋に幽閉しました。太子は暗い牢屋で老母のことを思いながら過ごしました。

ある日、太子は牢屋から秦王・政の前に引き出されました。いよいよ命もこれまでかと思われた時、太子は涙を流しました。秦王・政は「命が惜しいのか」と冷たく言い放ちました。それに対して太子は

「一国の民を守るために命を投げ出すつもりで来たのだから、命などは惜しくはない。ただ老母が私のことを思い、心配しているだろう。死ぬ前に一目私が元気でいる姿を見せてやりたい。どうか死ぬ前に一度だけ母に会わせてほしい」と懇願したのです。

すると秦王・政はあざ笑いながら、こう言ったのです。

「もし馬に角が生えて、カラスの頭が白くなったら、お前に暇をやるう」

それから太子は母親のために昼夜をわかつたらず一心に祈り



つづけたのです。すると、ある日、なんと角の生えた馬が宮中（みやちゆう）にかけ込み、頭の白い鳥が宮中の庭前の木に飛んで来たのです。

それを見てさすがの秦王（しんおう）も政も驚き、「本国（ほんこく）に帰るがよい」とつぶやくのがやつとであつたといひます。

そのことが日本の平家物語にも出ています。

「始皇帝（しこうてい）、烏頭馬角（うとうばかく）の変（へん）に驚き、綸言（りんげん）（天子の言葉）返らざる事（こと）を信じて丹太子（たんたいし）を宥（なだ）めつつ、本国（ほんこく）へこそ帰（かえ）されけれ」
「至誠天（しせいてん）に通ず」。一心（いっしん）を込めた祈りの叶わぬことはないのです。妙音菩薩（みょうおんぼさつ）は太子（たいし）の孝養（こうよう）の志（こころ）を哀愍（あいみん）されて、角（つ）のある馬（うま）と一緒に頭の白い鳥（しろがす）をさしつかわされ、太子（たいし）を故国（ここく）へ帰（かえ）されたのです。

日蓮聖人（にちれんしょうにん）は頭の白い鳥（しろがす）を見られ、ご自分（じぶん）が帰（かえ）る時期（じき）が近づいたことを悟（さと）られました。この後（あと）、文永十一年（ぶんえいじゅういちねん）二月十四日（がつにじゅうよっぴん）に赦免状（しゃめんじょう）が下（くだ）り、それが三月八日（がつはつ）に佐渡（さど）に届（とど）いたのです。



ほんとう ちゆうごく
本当に中国の故事の通りとなったのです。

せんじつ ごかいさんえ
先日、御開山会の法要の後に参詣された役員の方々と面
かい ととき にちれんしょうにん
会をした時、「日蓮聖人は佐渡で高い山に登って大音声で
さけ 叫ばれたんですよ」と、この話をしました。

ごじつ あまくさふきやうしょうたんにん
そうしましたら、後日、天草布教所担任の吉屋かおるさ
んがお手紙をくださいました。

せんじつ ごかいさんえ
「先日の御開山会ありがとうございます。日蓮聖人さま
のお話を聞かせていただき、島の一番高い所から広宣流布
ねが のお願いをさせていたただいております。大きな声で頑張っ
ています。山首上人さまのお話を聞かせていたただいて、名
ごや 古屋までお参りさせていたただいたこと、最高の喜びとなり
ました。感激いたしました」

にちれんしょうにん たか やま のぼ
日蓮聖人が高い山に登って叫ばれたという話を聞いて、
そくじつこう ひと
それを即実行する人がいるということに私は感心しました。



また、こういうことが大事だと強く思いました。

15世紀のヨーロッパのお話です。ドイツのトマス・ア・ケンピスというキリスト教の神父が『イミターシヨ・クリステイー（キリストのまねび）』という一冊の本を書き、ヨーロッパで大ベストセラーになりました。

『イミターシヨ・クリステイー』というのは、キリストの真似ということです。「何にも詮索しないで、黙ってキリストのした通りにする。ただ真似るのである。するといつしか、その意味するところも、ああそうであったのか」とわかってくる時が来る。一生懸命になってひたぶるに真似るのである。それが本当のキリスト者の生き方である」これがトマス・ア・ケンピス神父の主張です。

常識の世界では、真似るといことはつまらない、浅は



かなことだと考えます。猿真似という言葉があるくらいです。人の真似をするのはあまりほめられたものではない、人間は自分で考えて自分の判断で行動しなければいけない。常識ではそう考えます。しかし、信仰の世界は違うのです。自己の計らいを捨てなければならぬという場合があるのです。

永平寺の開山である道元禪師が雲水達に言われています。「学道の人には人情を棄つべき也」
学道の人というのは仏道を学ぶ人、人情とは世間の常識です。仏道を学ぼうとする人は世間の常識を捨てるべきであるということです。

また、こうも言われています。

「仏道に入るには、我がこころに善悪を分けて、良しと思
い悪しと思うことを捨てて、我が身よからん、我が意なに



とあらんと思おもうところを忘わすれて、良よくもあれ、悪あしくもあれ、仏祖ぶつその言げん語ご行あん履りに随したがいゆくなり」
自分じぶんの良よい悪わるいという分別ぶんべつを離はなれて、仏ほとけさまや祖師そしたち達の言いわれたこと・行おこなわれたことを真まね似ねしていけいと言いわれるのです。

現代げんだいにおいては、トマス・ア・ケンピスや道元どうげん禅師ぜんじが言いわれたようにそのままま実じつ行こうすることはむずかしいかもしれ
ません。しかし、私わたくしは吉屋よしやさんのように素直すなおに純粋じゆんすいな心こころで、
信しん仰こうしていくことが大だい事じであると思おもいます。お自じ我が偈げに説と
かれる「質直しちぢき意い柔じゆう軟なん」「柔和じゆうわ質直しちぢき者しや」とは、このことだと思おも
います。
素直すなおな心こころで理屈りくつぬきで信しん仰こうをする人ひとには、常住じょうじゆうの仏ほとけさま
のお姿すがたが見みえるのです。

